



# ピッポ新聞

2005

12

No.204

子どもの本専門店

## ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500円  
編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3  
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>  
Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

## クリスマスの本

クリスマスが輝かしいのは、昔この地上においてになって、小さい子どもたちを祝福してくださったあの方。目で見ることではできないあのお友だちがいてくださるからです。クリスマスが美しいのは、愛に満ちた人生の思い出の数々によって、いろいろられているからです。愛に満ちた人生とは、あらゆる幸せのなかでただひとつ追い求める価値のある本物の幸せを、求め、見出してきた人生のことなのですが、その幸せとは何かというと、それは、自分だけでなくみんなを幸せにすることの幸せなのです！

(「不思議の国のアリス」を読んでくださうたすべての子どもたちへ) 協明子・訳)



この文は、ルイス・キャロルの1871年版の

名作に描かれた  
クリスマス

『不思議国のアリス』(初版は1866年)に別刷りで挟み込まれた一文だそうです。これを若林ひとみが

自著の『名作に描かれたクリスマス』(岩波書

店 1890円)の結末で引用し、そして、最後に自身はこう結んでいます。

この地上では今でも紛争が絶えず、飢えや病気に苦しんでいる人々がいます。「クリスマスはプレゼントをもらうだけの日じゃあない」ことを、つまり、クリスマスで大切なのは隣人愛や平和という「クリスマス精神」なのだということ、みなさんの心にとどめていただきたいと思います。

ほくはこの冒頭に揚げた文章を、ここから孫引きしたのです。

この『名作に描かれたクリスマス』はさまざまに絵本や児童文学のみならず、文豪の描いた文学作品のクリスマスの場面を取りあげて、クリスマスにまつわる歴史や文化を探った本です。

いまや、この国の子どもたちやおとなたちにも、すっかりクリスマスは定着しています。子どもたちの間ではプレゼントをもらえる「楽しい」日として、また、若者たちは恋人とプレゼント交換する日として認識されているようです。サントからのプレゼントは子どもたちに夢をあたるだろうし、それはそれで良いのかもしれない。

しかし、最近一部の人の間では隣近所が競い合うようにして、家の回りを派手にイルミネーションで飾り、人に見せることが流行っているようです。それを馬鹿なテレビなどが取りあげ、近

郷近在からの人出でにぎわったり、さらに、街中でも、大がかりなイルミネーションがこれでもかという感じで、各地でその派手を競っているようです。

人はこれを見て「きれい！」と言っけれど、ぼくは驚きはすれど、きれいなどは感じません。こんなものよりも、雪の中を苦労して登った冬の山の峰の一瞬の白い輝きの方が何百倍も美しいと感じるのです。こんな、ぼくの感覚の方がおかしいのでしょうか。

それはさておき、

しかし、こんなことで良いのでしょうか？ こういう現象(イルミネーションで飾り、それをメディアが取りあげ、人々がこれをワァーと見学に行くなど)は、例を揚げたら枚挙に暇ありませんが、つい先頃も同じようなことありませんでしたか？ 9月に行われた総選挙がそうだったではありませんか！

熱しやすく覚めやすいのが、我が民衆の気質だとしても、忘れようがありませんよね。「郵政民営化はか非か」「刺客」「小泉チルドレン」こんな言葉がメディアに氾濫し、その雰囲気飲まれて自民党を圧勝させたことを。

その結果、小泉自民党がいまやどんな方向へむかおうとしているのか。市民に大増税を課し、平和憲法改悪し、「戦争のできる国」を目指そうとしているではありませんか。

あの時、小泉は「大増税を」あるいは「この国の国是である戦争放棄を放棄する」

ことが是か否かを一言でも我々の前で問うたでしょうか？ 聞こえてきたのは「民でできることは民へ」というワンフレーズだけでした。我々はこの三百代言によって錯覚させられたのです。「官から民へ」移行することがすべて善であるかのよう。

確かに「官」の仕事の非効率さは目に余るものがあります。ぼくなんか今でも、市役所へ行くたびに喧嘩して帰ってきますからね。だが、しかし、「民」は利益追求が最優先される所なのです。今起こっている、安全性を無視した利益優先の結果が、「マンションやホテル」問題ではないですか。ちよつと前の「JR西日本の脱線事故も効率(スピード)優先、安全無視の結果でした。

効率という事を言い換えれば、目に見える部分(見てくれの良さ)で評価してしまおうと言うことなただけで、物事は実は見えない部分こそより大切だということが多いのです。これこそ「民営化」出来ない部分なだし、してはいけない部分ではないでしょうか。それを、小泉はただただ「民へ」と叫び、民衆を騙したのです。

身近な所でも、効率化が実施されます。静岡市立美術館(アートギャラリー)が、来年度から民間委託されます。こういう物作て作らるまでが一部の人には大切だけれど作ってしまうと、後はお荷物になり民間へとなるようです。赤字を生み続けるからです。

憲法は言ってます「国民は健康で文化的生活を営む権利がある」とね。

市民が美術や演劇鑑賞するのは当然の権利です。行政はこれを提供する義務があ

るのです。(本来なら無料にすべきです)しかし、市民が芸術鑑賞をして人間としての喜びを感じることは効率(赤字)とは無縁の事ですね。

勿論運営のし方や催事の内容には批判すべき事があります。「メディアに丸投げ」という現状は大いに批判されるべきです。(新聞社・テレビ局は文化予算「市民の税金を吸い上げている」)

しかし、この批判は民間委託への批判とは質が違います。美術館は赤字でも税金で補填すべきです。いまや、保育園や図書館でさえ民間委託が畑上に揚げられているのです。

あー、またしても話が全然関係のない横道にそれてしまいました。

ぼくはここで本つて何て素晴らしいのだからかということ、若林さんの『名作に描かれたクリスマス』を紹介する事で、書きたかったのです。この本を読んで、ぼくは改めて強く感じたことだからです。

簡単に言うと「クリスマスはプレゼントをもらう日」と思っているこの国の多くの子どもたちが、ここに紹介されている本と接することで、実は全然別なクリスマスがあることを知ることが出来るのです。そこでは人々は「愛」を語り、「愛」を求め「愛」を与える世界があり、「平和」を考へ「平和」の為に戦う人々がいる世界があることを知ることが出来るのです。これこそが、本のもっている素晴らしさだとぼくは考えるのです。



# ねー、この本読んだ?

『どぶつたちのオーケストラ』(イーロー・オーリンズ・文 テイボル・ゲルゲイ・絵 小池昌代・訳 1575円 講談社)  
シリーズ名に「クラシック・セレクション」とあるように、



海外の少し前の絵本のシリーズです。本書も1958年に米国で初版が出版され、その本邦初訳です。内容は動物の街の様々な動物たちの音楽会の様子を描いた絵本です。たくさん動物が登場するし、たくさん楽器も紹介されています。よく絵を読むと動物の姿がユーモアたっぷりですよ。小さい子から楽しめます。



『ゆきがふつたら』(レベッカ・ボンド・作 さくまゆみこ・訳 1680円 偕成社)  
大雪の朝「ガオーガオー、ゴーゴー」という音で子どもたちは目覚めます。外を見ると除雪車が

雪掻きをしています。子どもたちは外に飛び出し、それを食い入るように眺めます。そこにはみるみる雪の山ができていきます。子どもたちの想像力は嫌がうえにも掻き立てられます。さあーなにがおこるのでしょか……。

『ヘンリーのしごと』(D・B・ジョンソン・作 今泉吉晴・訳 1260円 福音館書店)  
この絵本はH・D・ソローの考え方に共鳴



した、作者D・B・ジョンソンが描いた、くまの「ヘンリー」シリーズの第4作目です。訳者の今泉吉晴さん

もソローの考えや生き方に共鳴し、自身も山梨と岩手の山中の小屋に暮らし、動物の生態を研究している動物学者です。今泉さんもこの本の主人公のくまのヘンリー(実はソローその人)のように自然の動植物をじっくり観察して、動物や植物の本当の姿を彼ら自身から教わっているのだそうです。さて、絵本の中でヘンリーは人に「なにをしているの?」と問われると、「仕事にいくところ」と答えます。ヘンリーの仕事ってどんな仕事なのでしょうね? 訳者の今泉さんも今、ヘンリーと全く同じような暮らしをしていますよ!

『クリスマスをめぐる7つのふしぎ』(斎藤洋・文 森田みちよ・絵 1155円 理論社)  
子どもは成長するにしたがって、サンタや



クリスマスについて、さまざまな疑問が湧いてくるようです。この本の主人公も、なにやらクリスマスについて

不思議に感じていることがあるようです。その疑問に答えているのはどうやらパパの同僚のようです。パパは警察官で今夜は夜勤に就いているため、同僚がパパに頼まれておとこの子の所に立ち寄ったようです。疑問は七つも続きます。さてパパの同僚はじょうずに疑問にこたえられるのでしょうか?とところで、最後にパパの同僚が誰だか読者はわかるかな……。



『ぐらぐらの歯 きかんぼのちいぢやないもつと』その1 (ドロシー・エドワーズ・作 渡辺茂男・訳 坂井駒子・絵 1155円 福音館書店)

この童話の多くは「わたしがまだ小さくて、わたしのきかんぼのいもつとがもつと小さかったときのことでした。ある日……」とはじまるのです。きかん坊の妹は数々の

悪さをしたり、わがままをいいますが、わたしをふくめ回りの人は何故かきかんぼうのいもつと憎めず、暖かくみまもるのです。大人たちの目が子どもたち注がれているからこそ、子どもは安心してイタズラやわがママが言えるのですね・・・。

この本は以前の「きかんぼうのちいさいいもつと」の中から 編を選んでの出版だそうです。さらにその2その3と出るということですから、新しい話がくわわることでしょう。

『子供の十字軍』(ベルトルト・ブレヒト 長谷川四郎・訳 高頭祥八・絵 157 5円 パロル舎)



このブレヒトの詩(バラード)は、高頭祥八さんの解説を読むと、中世の「子ども十字軍」や「ハーメルンの笛吹」を下敷きに、1939年のドイツ軍のポーランド侵攻に怒りなどを背景に作られた詩だそうです。このバラードでは最後に吹雪の中55人の子どもたちは消えてしまうのです。何時の時代でも子ども、女性、老人など社会的弱者が先ず被害を被るのです。そ

れが戦争の場合は最も顕著に現れます。戦争放棄の憲法が改悪されることが声高に語られている今だから、この本を大人にも子どもにもすすめたい。

『真実の種、うその種 ドーム郡シリーズ3』(芝田勝茂・作 佐竹美保・絵 2625円 小峰書店) ドーム郡シリーズの3巻目で物語の完結編でもある。



物語は退治したはずのフユギモソウの種が災いをドーム郡にもたらす兆候がでてきた。そこでテオ・トーマ・リンの3人が選ば

れ、その種を持つてすべての根元であるという「ルピア」があるという、ゴドバルへ向けて、困難な旅へ出発するのだが・・・。560ページを越える長編だが、とても示唆に富む会話や考え方が随所に出てくるし、物語としてもとても楽しい冒険物語です。前述したように「ドーム郡ものがたり」「虹への旅」そして本書と全3巻の長編物語ですから、この冬読んで見てはどうでしょうか。

## インフィメーション

『おじさんが かぶを うえました』 月刊絵本「こどものとも」五十年の歩み 発売! 2625円

## すごろく・かるた

タイトル	価額(税込み)
ばばあちゃんすごろく	550円
せなけいこ おばけすごろく	1050円
じごくのそうべいすごろく	1050円
伝承 犬棒かるた (鈴木出版)	945円
いろはかるた だじゃれゆうえんち (民衆社)	1050円
せなけいこ おばけかるた	1260円
あいうえおかるた 五味太郎	1050円
さるるるかるた 五味太郎	1050円
はれぶたかるた	1050円
どうぶつことばあそびかるた	1260円
にぴきのねこかるた	1260円
ぐりとぐらかるた	1050円
ばばちゃんのかいしんぼかるた (福音館書店)	1050円
魚 カード	1260円
花 カード	1260円
昆虫 カード	1260円

★年末年始の休業は十二月二十九日(水)～一月三日(火)までピッコはお休みさせていただきます。この間、古書の発送業務も休み